聞名仏教

第 132 号　　毎月発行
（発行日）2021 年 9 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
mail:bachkantata2mubansou@zeus.eonet.ne.jp
http://nenbutsuji.info/
振替 00930（7）146886

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

無駄ぼね折り

先日もある同行がきまして、

「仏法というものは、お寺に参ってお説教を聞かねば頂かれぬように思っておりましたところ、このあいだはネズミ取りの金網の中で右往左往しているネズミの姿をジット見ておりながら、仏の教えをシミジミと知らせていただきました」

と話されました。

そこで私は、その同行に向かって「ネズミから教えられたとはどういうことですか」と尋ねたところ、同行が申しますには、「金網の中のネズミは網から出ようとしてアチラを噛(か)みコチラを噛(か)みしてアバレまわっているのです。私はネズミが無用な苦労をしていることに気づいた途端(とたん)、これはネズミではない、今の私の姿であったと知らせてもらって念仏したことでありました云々」と。

この話を私はありがたく聞いたことでありました。ネズミが愚かにも金網の中で血まなこになって無駄骨折りをしていると思うが、実はわれわれ人間が全くネズミと変わらぬ無駄骨折りばかりしているのではないでしょうか。事が大きいか小さいかの相違だけで、尊卑貴賤ひとしく網の中のネズミの苦労を繰り返しているに過ぎないのではありませんか。万人が成功をねらって一生けんめいに苦労するのですが、結局は失敗に終わるのみです。

世の中には大成功したと言って羨望の的になっているような人でも、結局はネズミが金網の中で外に出ようと狂い回り、一つの網目から口を出してここから出られるであろうと一時的な喜びを持ったのと五十歩百歩ではありませんか。結局は失敗に終わるのみです。

人生はいかに努力しても無駄骨折りに終わるだけです。最後は宿業の金網から一歩もでられないのが人間の本当の姿ではないでしょうか。われわれ人間は「自由を獲得せねばならぬ」と言って意気込んでいるのですが、結局無駄骨折りに終わるのみでしょう。

今の同行は、また重ねて申しました。

「ネズミの金網の中のエサを食おうとして網の中に入ったところ、網から出られなくなったので、エサを食うことを忘れて、一生けんめいに網から出ようとするのでありますが、絶対に出られないのですから、出ようとする無駄骨折りをやめて落ちついてエサを食べればよいのに、いつまでも金網を噛んで苦しんでいる姿は全く私の聞法の態度そのものであると知らせてもらいました。私は永年仏法を聞かせて頂き、後生の問題や心の始末は、凡夫の力が及ばぬと知りながら、いつしか〈これでよいか〉〈あれでよいか〉と手を出して苦しんでいる姿は、全く金網の中から手足を出して苦しんでいるネズミを、寸分変わるところがないと知らせていただき、いよいよお念仏を喜ばしてもらいました」と話されたのを、私はまことに尊く、また有り難く聞いたことでありました。

（了）

【法味寸言】

佐々木蓮麿

＊聴聞の秘訣は、一つの法話で満足するまで聞くこと。いろいろ聞こうとすることは迷いの道に入ること。

＊聞いても聞いても聞こえぬというは、聞いているのでなく、自分に納得しようとしているのだ。法を聞くとは、自分の胸に納得する用事のない謂われを聞くのである。

＊一人の道を行き、一人で充たされることが聞法の一道。

信心夜話

今日く。とかく今迄聞いたことや覚えたことを云いならべて、御化導のあとざらえするのが御法義のように心得るものが多いが、そうではあるまい。

是について明信寺師の仰せに、多くの人がこれまで聞きこんだことを信じている。ここは実に大事の処で、聴聞と云うは今日ばかりと聞くのじゃ。

古人曰く。今迄大徳方について聞いたことを皆すてて、今ここで弥陀をたのむのじゃと。（禿義峰著「染人百話」より）

＊　＊

信心の座談の時、「なでつけ安心」ということがよくいわれる。これは本当の信心ではなくて、真宗のお話を聞いて覚えた教法の言葉でもって、自分に言い聞かせて安心している姿をいう。怒りや欲の心が起こったとき、「ああ煩悩の深い私だ。けれどもこのような者をアミダ仏は助けてくださる。有難い」という。話に間違いはないけれども、とかく教えの言葉を自分になでつけて安心している場合が多く、しばらくするとなでつけた言葉は剥がれ、元の虚しい状態になる。

教えを聞き始めた頃はアミダ仏の慈悲の言葉を聞いて感動して涙ながらに聞いたりすると、もうそれで信心を得たと思い、これでよしと思ってそこに落ち着いてしまう。

けれども、こういう感動はしばらくすると薄れてくるのでなお聴聞を続けるが、どうも物足りない、喜べないという疑念が起る。そんな時、宗祖の「よろこぶべきことを、よろこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもいたまうべきなり。よろこぶべきこころをおさえて、よろこばせざるは、煩悩の所為なり。しかるに仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫とおおせられたることなれば、他力の悲願は、かくのごときのわれらがためなり」と仰せられた「歎異抄」の言葉などを引っ張り出してきて、「喜べないこんな私を阿弥陀様は助けてくださる」となでつける。なにかしら気持ちの悪いのを教えの言葉で押さえつけてそこに落ち着こうとする。こういうことを繰り返して一生が終わる。

この「歎異抄」第九章などは、非常に有難いお言葉であるが、なでつけるにはもってこいの言葉にもなる。「宗祖もよろこべないという、私もよろこべない。同じだ。これでよかった」などと思って自分を許すのである。

明信寺師が「**多くの人がこれまで聞きこんだことを信じている**」といわれる。今まで聴聞して、聞き覚えたお聖教の言葉など、それを信じるのを信心と思っている。たとえば称えているお念仏を押さえて、「これは私の口から出ているが、大行といってアミダ仏のはたらきなのだ」と、今までに聞いた話を持ち出してきて、それを納得するのを信心だとする。多くの人がそうなっているといわれる。いわば教えを掴むのである。真実信心も仏の言葉を信じるには違いがないが、信じることが同時に生けるアミダ仏にであっていることである。

しかし教えを掴むということは信心を頂いた後も続きうるのである。信じたからといって、いつもかつもアミダ仏の仰せを実感して生活することはできない。しかしながら、そんな中に、ふいと「助ける」「引き受ける」「ここにいる」という端的な大悲の仰せが突き刺さる。それは極めて端的な仰せであり、声であり、音であって、そこに我を超えた大悲であり、いのちを感じるのである。これが反復していくのである。

覚えた教義について確信を強めることではない。いわゆる「勅命」を聞くのである。

ただ平生は教えをなでつけたり、掴んだりする、これが止まないのである。しかしこれが一概に間違いではない。これもお育ての中だと言える。教えを聞いて身に引き当てて考えるしか凡夫は普通出来ないのだから。

こうして計らい通しの中にあって、計らう自力の無効を知らされる。無知無力、疑惑無信の救われ難き身と知らされる。聞いた教義は一切役立たずとなる。

ここにおいて「**今迄大徳方について聞いたことを皆すてて、今ここで弥陀をたのむのじゃ**」といわれるのはここである。南無阿弥陀仏の仰せ、「タスケル」「ヒキウケル」の直付けの仰せが聞こえる。

今まで聞いたことや覚えた言葉を頼りにするのではない。覚えた教義は概念であって、ナマのアミダではない。南無阿弥陀仏のお声はアミダ仏ご自身のお出ましである。「ここにいる」と。

（了）

摂取不捨の真理①

浄土真宗の教えのキーワードは「摂取不捨」という言葉ではないでしょうか。例えば、アミダ仏の本願は「摂取不捨の誓願」といわれ、名号は「摂取不捨の真言」といわれ、アミダ仏は「摂取してすてざれば阿弥陀となづけたてまつる」といわれ、信心は「信心うたがいなきそうろうは摂取せられまいらすゆえとみえてそうろう」といわれ、「摂取不捨の利益にさだまるを正定聚となづけ」られるのであります。アミダ仏も本願も名号も信心も正定聚も「摂取不捨」で語られるのです。その「摂取不捨」の用きを宗祖は『浄土文類聚抄』の中で、

「ああ、弘誓の強縁、多生にも値い難く、真実の浄信、億劫にも獲叵し。遇信心を獲ば遠く宿縁を慶べ、もしまたこのたび疑網に覆蔽せられなば、更って必ず曠劫多生を径歴せん。摂取不捨の真理、超捷易往の教勅、聞思して遅慮することなかれ。」

といわれ、ここで「摂取不捨の真理」と押さえられています。「真理」という言葉は、アミダ仏の摂取不捨の真理は普遍的な用きであることが示唆されていると思います。

ここでは摂取不捨の真理を説かれた本願の教法は〈超捷易往の教勅〉であって、横っ飛びに素早く救われる法（超捷）であるから、本願を「聞思して遅慮することなかれ」とここでお勧めになっています。本願の教勅をぐずぐずせずにそのまま聞き受けよといわれるのです。

この摂取不捨の真理は「教勅」すなわち南無阿弥陀仏の「勅命」となって十方衆生に喚び続けておられます。

この勅命とは絶対的な仰せということで、アミダ仏の私たちに対する仰せです。南無阿弥陀仏の〈南無〉とは「マカセヨ」であり、〈阿弥陀仏〉は「摂め取って捨てない」すなわち「引き受ける」の仰せです。「マカセヨ」といわれるのは、私たちが人生に破綻し、行き詰まり、困窮している状態になることを知り抜いて、この私たちをあるべき安らかな状態へ至らしめんと計らい喚びかけたもう仰せです。

また「摂め取って捨てない」とは私の悪業煩悩の罪深く行き場のない者を受け取り、ひきいて仏にならしめんとの仰せです。

ただ私たちは、アミダ仏が見ておられるような救いのない状態にあることを知らず、「自分は助けてもらう必要はない」と思って、いつまでもアミダ仏の仰せをはねつけてしまっているのです。

さてこの摂取不捨の真理とは、アミダ仏（光寿無量）と人（諸物）との普遍的な関係です。絶対無限なるアミダ仏と相対有限の人とは別々でありながら、離れがたく一つであってアミダ仏を離れて人は成立しないという真理です。

この真理は人の姿や行いの善し悪しを超えており、人のいかなる悪業煩悩によって一指だにできないゆるぎない仏と人との関係であります。私たちの煩悩悪業にもかかわらず、私たちはアミダ仏の大悲のいのちに抱き取られているという真理です。

しかしながら人はこの真理を知らず無視し、自我を先立てて、自我の欲求を満足しようとばかりに生きています。そこに不満と焦燥、それに様々な悪がそこから跋扈してくるのであります。そしてこの自我中心の生き方を、生まれ変わり死に変わり続けて流転してきたといわれるのであります。

このことをインドの仏教学者のチャンドラキールティ（600～650）は、『諸々の煩悩とわざわい（禍）は残らず有身見から起こる。諸煩悩とは貪欲など。諸わざわいとは、生老病死と愁いなどである。

有身見とは、「私」や「私のもの」と思うそのような形式で働く煩悩意識。』

といっています。「私」という自我を中心にして、身体を「私のもの」と見（有身見）、そしてさまざまな物を外に貪欲しています。ここからもろもろの煩悩や愁いが起るといわれるのです。

実際は、アミダ仏のはからいないのちを離れては私たちは一息もすることができず、一思いも思うことができません。生きることも死ぬることもできません。私の存在が今ここにあるという、そういうことが成り立つ場がアミダ仏のいのちの用きであります。

人の存在がそこで成立しているアミダのいのちの場は人の行いの善悪を超えています。そこでは人の行いの善悪は一切断たれ、大悲のいのちが無償に与えられています。この恵まれたい

のちの場に人は生かされていて、ここを離れて私のいのちもないということです。

これを無視するところに迷いがあり、苦しみが起こり、邪悪が発生してくるのであります。

しかるに人はこの大悲を含んだいのちの場を無視して、自我だけで生きようし、「我と我が身」の安全の確保と拡大を図って、その思いを中心に是非善悪、利害損得を計らって生きようとしています。それを煩悩具足の凡夫と申します。

このように摂取不捨の真理に背いて流転している衆生に摂取不捨の真理それ自らが衆生に用きかけてこの真理に目覚ましめようと用いてくださるのであります。それがアミダ仏の光明無量の用きです。この光明はアミダの本願として用いていることを説いてくださったのが釈尊であり、その教えが『佛説無量寿経』であります。宗祖は、

「大無量寿経言といふは、如来の四十八願を説きたまへる経なり。」

と仰せられ、アミダ仏の四十八通りの誓いとその成就を説かれました。就中、第十八願に一切衆生をしてアミダの摂取不捨の救いにあずからしめてくださる大悲のお心を説かれました。

第十八願のお心は南無阿弥陀仏の名号の言葉として衆生に称えしめられ、聞かしめてくださいます。その名号を私たちに与え聞かせてくださるのは第十七願の用きによってです。

この十八願の思し召しは、摂取不捨の真理から「罪はいかほどあろうとも我は汝を抱いている。我をタノメ」と仰せくださっています。「そのままなりで引き受ける」「助ける」の勅命であります。

この本願の勅命によって易く浄土に生まれ往くことができますので「易往の教勅」といわれます。そういう摂取不捨の真理は「タスケルで我をタノメ」の勅命となって私たちに喚び続けておられます。それが一声のお念仏のお心です。

そして「遅慮することなかれ」と仰せられるのは、アミダ仏の仰せを聞いて、自分の頭に相談せずに、そのまま受け入れてくれよのご親切であります。

私たちは摂取不捨の真理が摂取不捨の真言（南無阿弥の言葉）である〈南無阿弥陀仏〉のみ言葉となって喚びかけてくださる仰せ、その仰せに喚びさまされて、「ああ、このような私を引き受けてくださるアミダ様よ」と気がつかせていただくのであります。

そうすると私はアミダ仏と離れない身であり、アミダ仏の大悲のいのちの場に置かれていることを知り、アミダ仏に摂取されていることを知るのであります。これが〈摂取不捨の利益〉であり、人生全体の救いとなってくださいます。

アミダ仏に現在只今から離れない身であることを知らされますから、死してアミダ仏の領域である浄土に往くことに疑いがなくなってきます。そこで浄土に生まれることが定まったともがらを「正定聚の位に入る」といわれるのです。

このようにアミダ仏に摂取されるのが信心であり救いです。宗祖は摂取するアミダ仏をアミダ仏の心光、あるいは摂取の心光ともいわれました。摂取するのはアミダ仏の摂取のお心であり、助けられるのはこの摂取のお心に凡心が摂め取られるからだといわれています。このようにアミダ仏の摂取の用きを心の用き、仏心の用きで宗祖は示しておられます。

なぜアミダ仏の救いの用きを心光という心のはたらきで表されるかというと、私たちがこの真理に気がつくのも知るのも心に於てです。真理を真理と気づくのは心の領域のことがらです。ですから救われるのも心に於てですから、救いたもうアミダ仏の用きも心の用きで示されるのではないでしょうか。

（了）

【住職雑感】

久しぶりに大腸カメラの検査を受けた。昔一度受けて、その時に大きなポリープがあって、医師から「もう少しで癌になりかけていた。二・三年に一度は大腸の検査をしなさい」と言われたが、それ以後、殆どほっておいたのである。後期高齢に入り、今一度は受けておいた方がよかろうと思いやっと先日行なった。検査をするのは苦痛ではないかと敬遠していたのであるが、実際は苦痛が殆どなかった。嫌なことやしんどそうなことも実際に当たってみると思っていたほどの苦ではない場合が多い。むしろ取り越し苦労の苦の方が多い。人生の苦痛や苦労の大半は取り越し苦労ではないかと今までの人生を振り返って思うのである。事に実際に当たれば、道は自ずから与えられるのであり、行き詰まりは「思い」にのみあると知らされる。生活苦も「食うてゆけなくなるのではないか」という不安の苦が生活苦の大半である。癌の場合でも実際の癌の苦痛よりも、「癌になるのではないか、なったら困る」という不安の苦の方がずっと大きいと思う。それほど人は「自分の思い」に苦しめられる存在である。「心は万劫の怨みなり」と説かれているが、自分の心こそ自分を苦しめる張本人である。どうにもならないままどうにかなっていく。どうにもならないのは我が心であり、どうにかなっていくのは大いなるいのち（無量寿）のはたらきであろう。